講壇点滴

主イエスの十字架の死

ルカによる福音書二三章四四～五六節

牧師　姜　徑　米

主イエス・キリストが十字架の上で息を引き取られました。主イエスの最後のお言葉は「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」です。その前に「イエスは大声で叫ばれた」とあります。「叫ぶ」というのは大声ですることです。ですから、この「大声で叫ばれた」という言い方は強調されており、大音声で叫んだという様子を描いています。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」という言葉は、もっと静かに、穏やかに語られた言葉のようですが、主イエスは大声で叫ばれたのです。

主イエスのこの最後の大声での叫び、それは、主イエスが、今全地を覆っている闇、罪の中に閉ざされてしまっている暗さの中から、神様に呼びかけてくださった声です。神様は罪人である私たちから遠く離れ去ってしまっておられる、もう私たちは神様に見捨てられてしまっている。しかしその暗闇、神様に見捨てられた絶望の十字架の上から、神様の独り子であられる主イエスが、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と大声で叫び、私たちの罪のために遠く離れ去ってしまった神様を呼び戻してくださっているのです。

主イエスがご自分の霊を父である神の御手に委ねることによって、闇に覆われた地上と天におられる神様との間をつないでくださり、結び付けてくださっているのです。私たちが陥っているその闇の中へ来てくださり、十字架の苦しみと死を味わってくださった主イエスが、神様に委ねてくださり、神様が主イエスを受けとめてくださることによって、罪の闇の中にいる私たちにも、自分を神様に委ね、主イエスによって私たちの父となってくださった神様との関係を整えられ、神様との良い交わりを持って、神様を礼拝しつつ生きる道が開かれたのです。主イエスの最後の大声での叫びは、そのように私たちと神様をつないでくださり、私たちにも、神様の御手に委ねる道を開いてくださったのです。

主イエスはこのように大声で叫んで息を引き取られました。この主イエスの死によって、全地を覆っていたあの闇は消え去ったのです。そしてそこには、新しい世界が開かれていったのです。

毎週礼拝を捧げます。月一回聖餐にあずかります。礼拝と聖餐において私たちは、主イエスが罪人である私たちのためにご自分を父の御手に委ねて死んでくださり、それによって罪人である私たちを神様とつなげてくださった、その恵みにあずかります。この恵みの中で私たちも、自分の歩み、人生を神様にお委ねしつつこの人生を歩む者とされていきます。神様を信頼し、その御手に自分を安心して委ねることができるようになるのです。

（二〇二四年三月二四日　公同礼拝）

三月講壇一覧

第一主日（三月三日）　公同礼拝
「柔和な王」　高橋和人牧師
ゼカリヤ　九・九～一〇
マタイ　二一・一～一一

第二主日（三月一〇日）　公同礼拝
「ステファノの殉教」　姜　徑米牧師
詩編　二二・二
使徒言行録　七・四四～六〇

第三主日（三月一七日）　公同礼拝
「祈りの家」　高橋和人牧師
エレミヤ　七・一～一一
マタイ　二一・一二～一七

第四主日（三月二四日）　棕梠の主日礼拝
「主イエスの十字架の死」　姜　徑米牧師
詩編　三一・六
ルカ　二三・四四～五六

第五主日（三月三一日）　イースター・復活日礼拝
「復活の主が分かる時」　高橋和人牧師
エレミヤ　四九・一二～一三
ルカ　二四・一三～三五

第三主日（二月一八日）　公同礼拝
「ステファノの説教」　姜　徑米牧師
創世記　一七・八
使徒言行録　七・一～一六

第四主日（二月二五日）　公同礼拝
「ステファノの信仰」　姜　徑米牧師
申命記　一八・一五
使徒言行録　七・一七～四三